

《スポーツと民俗学》再論 — ドイツ民俗学への案内として —

河野 真（比較民俗学会）

昨今の日本民俗学では世相に合わせたテーマが賑わいを見せている。震災と復興、また一昨年からはコロナ禍に因んだ発表が急増した。どちらも実際問題としては、民俗学の知見が一般から強く期待されているわけではない。それだけに自由な接近ができ、また学際的なフォーラムへの可能性を含んでもいるが、やはり外野席での四方山話に近い。であれば、少なくも同程度で話題になってもよい分野がある。五輪開催の糸余曲折をも併せた大きな分野、すなわちスポーツである。相撲や古式泳法のような伝統の要素に焦点を合わせるのではなく、陸上競技やサッカーやアイス・スケートなどスポーツと聞けば普通に思い浮かぶ種類である。同じく世相でもそれが論じられないのは、日本民俗学にはそこへ踏み込む学術的な備えが手薄なことを示している。敢えて刺激的な言い方するのは、筆者が専門とするドイツ民俗学に目を向けてほしいからである。なおこれは、拙著『民俗学のかたち — ドイツ語圏の学史を探る』（創土社 2014）の一章「スポーツと民俗学」の続きという趣旨でもある。

ドイツにおいてその局面を切り開いたのは、民俗学の改革者として知られるヘルマン・バウジンガーであった。もとより目移りや無手勝流ではなく、民俗研究の必然性と体系のなかに位置付けられている。基本理論としては『科学技術世界のなかの民俗文化』（1961）年があり、そこから考察はスポーツへも延びていった。またその見解はスポーツ関係者にも注目された。バウジンガーは、ドイツ・オリンピック委員会の創設 100 周年の記念式典（1995 年）における講演者で、講演の中身は通常の祝辞を超えた、オリンピックへの辛口の激励であった。かく、民俗学がドイツにおいてスポーツ研究、またスポーツをめぐる一般の動向とリンクするに至ったときの視点と研究方法を簡単に紹介したい。

一つ目は、スポーツ大国ドイツを支える活動組織の批判的分析である。それが結集の原理を問う面からであったのは民俗学ならではの視角であった。ドイツ人（日本から見ると凡そでは西洋の人々とも言えるが）とはどういう集団を作る人間なのか、はバウジンガーの出発点の問題意識であり、ドイツ民俗学の大きな課題でもある。特に近・現代のそれ、すなわちクラブ・組合（アソシエーション・ソサエティ／ドイツ語ではフェルайн）に注目すると、スポーツは大きなモチベーションである。二つ目に、文化の構造転換の把握である。世界的に知られるドイツのスポーツ学者オモー・グルーペは『文化としてのスポーツ』（邦訳あり）において、『社会・文化のスポーツ化』すなわちタイトルを逆転させたスポーツとしての文化への推移を論じた。バウジンガーの理論はこの認識と共に鳴るところがあったのである。

三つ目に、ドイツ民俗学のスポーツ研究に注目する意義だが、現代世界に共通の社会・文化の趨勢が見えると共に、スポーツ関係の組織や運営の西洋と違った日本の特質にも気づかせられる。殊にスポーツの実践訓練をクラブ活動として学校がになうことには日本人は疑念を抱かないが、世界的には変わり種で、近年その限界やマイナス面が顕在化している。西洋と比較して現代日本の集団の特質を探る手掛かりに日本民俗学も注目してほしい。